

## 龍泉窯跡を訪ねる

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 達夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/2982">http://hdl.handle.net/2297/2982</a>

## 龍泉窯跡を訪ねる

佐々木達夫

2005年11月、上海で開催された「2005年古陶瓷科学技術国際討論会」後に龍泉を訪ねた。5日は上海から800km車で走って龍泉に着く。6日は龍泉金村大窯跡、龍泉上洋鎮木岱口の現代龍窯、龍泉青瓷博物館、7日は龍泉安仁安仁口峰脚窯跡、麗水処州青瓷博物館、8日は金華鉄店窯跡、民間人瓷器收藏品を見学する。

### 龍泉窯跡

龍泉窯は広大な窯跡群で、現在の麗水、温州地区で500カ所を越える宋元明代の青磁窯跡が発見された。なかでも龍泉市を東流する瓊江上流の龍泉溪、秦溪に沿って360カ所の窯跡が残り、1970代中頃から調査が始まり、1979年から1983年にかけて龍泉市から雲和県にかけての龍泉溪ダム建設による水没窯跡緊急調査で山頭窯、大白岸、安仁口、安福、上年几などの窯跡が発掘された。龍泉窯跡研究は陳万里「龍泉青瓷の初歩調査」『瓷器与浙江』によって始められ、1957年に大窯が調査されるとその後次々と龍泉窯跡の調査が続いた。朱伯謙の『龍泉青瓷研究』文物出版社、1989、『龍泉窯青瓷』芸術家出版社、1998など、多くの研究成果が公表されている。

窯跡の多くは龍泉溪とその支流の両岸に築かれている。龍泉青磁は5～6月の水量の多い時期に龍泉溪を船で下り運ばれ、麗水から瓊江に合流して海岸の温州に至ったと推定できる。種類は厚胎厚釉刻花、薄胎厚釉(類官)、厚胎厚釉があり、元代の厚胎厚釉が中心となる。

現在は窯跡の多くがダムに水没した。2005年に龍泉市東側窯跡の発掘報告書が刊行され(浙江省文物考古研究所編『龍泉東区窯跡発掘報告』文物出版社、2005年)、発掘された218基の窯跡は宋21、宋元12、元114、元明47、明23に分類され、北宋に始まり、南宋に増加し、元代が中心となり、明代に衰退する。製品は地区によって違いがみられるものがあり、他の地区と同じ製品を作る場合もある。

### 龍泉大窯

龍泉大窯窯跡は1957年に調査され、龍泉でもっと

も著名な窯跡である。1956年に杭州郊壇下官窯跡が発掘された翌年のことである。1960年1～3月には大窯の龍窯跡7基と工房跡が発掘され、同年4～5月に金村でも龍窯跡2基が発掘された(「浙江省龍泉青瓷窯跡調査発掘的主要收穫」1963)。

龍泉市の西部に位置し、急な小川と狭い谷を登ると部落があり、そこを越えると谷の両側に畑が広がり、斜面に窯跡群が広がる。2カ所の窯跡を見学した。左側斜面の段々畑に蜜柑が植えられ、元代青磁の盤碗片や匣鉢が散乱する。谷を越えた向かい側の斜面上方には幅が狭く長い龍窯跡が残り、周辺には元代の青磁盤碗片が落ちている。龍窯跡の窯体壁は匣鉢が積まれ、内壁で仕切られ、四角の通焰孔が並んで見える。

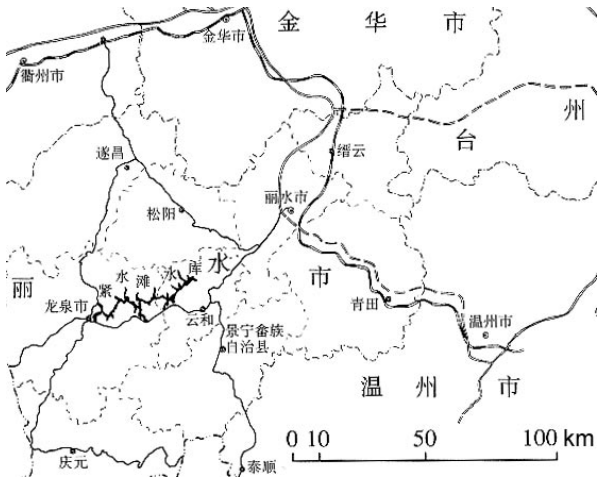
案内頂いた朱伯謙の意見は次のようである。大窯は官窯で、黒胎及び白胎の官窯タイプが大窯から出土し、大窯の北部にある類kou Wa窯様窯跡でも黒胎の官窯タイプがある。大窯の良質白胎青磁が弟窯、大窯の黒胎青磁が哥窯と呼ばれている。両者はともに大窯製品であり、伝説のように分類するべきではない。

### 龍泉峰脚窯

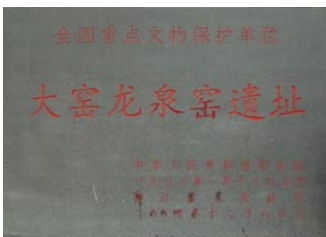
龍泉市安仁鎮の安仁口に位置する峰脚窯跡はダムに沈んだが、渇水期に水面から龍窯跡が現れる。『龍泉東区窯跡発掘報告』の表をみると、峰脚窯跡で発掘された龍窯跡は6基ある。5基は元代、1基は宋元代である。斜面を匣鉢と青磁片が表面を覆って散乱している。元代が中心で、周囲及び川対岸に宋元代の窯跡があり、斜面を匣鉢と青磁片が覆っている。龍窯が斜面を登っている。最初の発掘成果は1986年に報告された(上海博物館考古部「浙江龍泉安仁口古瓷窯跡発掘報告」『上海博物館集刊』3, 上海古籍出版社, 1986)。世界各地から出土している龍泉窯青磁と同じものが散乱している。

### 現代の龍泉窯・龍窯

現在も宋元代の龍泉青磁が写され、龍窯で焼成される。龍泉上洋鎮木岱口龍窯で2カ所の龍窯を見学した。斜面を登る地上式の龍窯は焚き口付近に薪が積まれ、右側に連続して出入り口があり、左側に色見孔が連続して空く。粘土塊に青磁碗の破片に丸い穴を開けた色見が今も使われ、宋元代と同じ丸い粘土塊が高台内に置く焼台として用いられている。最上部に大きな煙突



龍泉窯跡位置図



龍泉大窯窯跡表示板



龍泉大窯の村



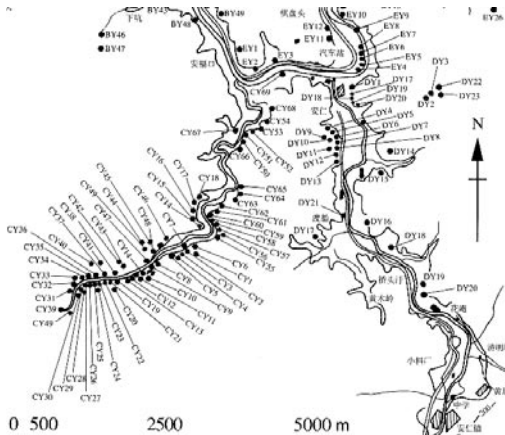
龍泉大窯窯跡は谷の両側にある



龍泉大窯窯跡、蜜柑畑となる



龍泉大窯窯跡、畑の斜面に龍窯が残る



龍泉溪谷のダムに沈んだ龍泉窯跡



龍泉安仁安仁口峰脚窯跡



龍泉安仁安仁口峰脚窯跡



安仁口の単室窯跡



龍泉安仁安仁口峰脚窯跡の表面に散乱する青磁



龍泉上洋鎮木岱口の現代龍窯（1）



龍泉上洋鎮木岱口の現代龍窯（2）



龍泉上洋鎮木岱口の現代龍窯（3）



1980年7月、龍泉市道太郷供村で明正徳戊寅(1518)の紀念墓が発見され、龍泉用青磁の碗、高足碗、瓶、壺、香炉が出土した。いずれも造形は整い、釉層は豊潤である。龍泉青瓷博物館に展示。

龍泉青瓷博物館展示品



麗水市処州青瓷博物館



麗水市処州青瓷博物館蔵展示品

菱口刻花盤，叶英挺編『梅子初青』西冷出版社，2005年。龍泉窯、菱口刻花盤、青緑釉、外底部に輪状の無釉部分があり、朱紅色となる。明、高5.3cm，口径27.4cm，底径12.4cm。口縁部は菱花口となり斜めに折れ、胴部は浅い弧状、底部は圈足。外面に菊弁花文が刻まれ、内面胴部には纏枝菊花文、内面底部には葵花文が刻まれ、花文の中に吉大利の3文字がある。盤が墓誌に使用され、内面底部に「劉経公元記許儒人 嘉慶戊午年十一月廿一子時生同治己巳年正月初十年丑時没」と刻される。1798年の紀年資料である。



金華鉄店窯跡



金華鉄店窯跡、竜窯跡



金華鉄店窯跡と表面に散乱する青磁、黒釉陶器、鈞窯タイプ陶器

が立つ。電動式となった唐白で陶土を突いている。釉薬用の固い白灰色石、素地用の柔らかい白色陶石が使われる。製品は宋元代の青磁とそっくりの器形と釉色に作られている。

## 博物館

龍泉青磁博物館は宋元明代の青磁を中心に、清代と現代の青磁も展示している。龍窯の模型、大窯窯場の復元模型もある。1518年墓から出土した青磁がある。龍泉青磁は1階の3室に展示される。

麗水処州青瓷博物館は私立博物館で、訪問した日が開館日であった。2階の2室に優品と採集品が展示され、所蔵品は『梅子初青』に紹介されている。墓誌として使われた年号が刻まれた青磁盤がある。

金華ホテルに浙江省の陶磁器展示室があり、併せてホテル会議場で青磁の優品を臨時展示し討論会が開かれた。

## 金華市鉄店窯

金華市鉄店窯跡は市内から30kmほどの農村地帯にあり、窯跡の下方は池となる。陶土を採掘した穴に水が溜まったという。池の周りに匣鉢と陶磁器片が散乱する場所が3カ所あり、1カ所は龍窯跡が見える。宋元代の青磁、黒釉、鈞窯に類似した製品がある。素地は灰色から黒色、白化粧土上に釉をかける。新安沈没船出土品の鈞窯タイプの産地として著名になり、1989年12月に浙江省重点文物保護単位、2001年6月に全国重点文物保護単位となる。金華地域の胎州窯は越窯に匹敵する青磁産地で400カ所を越える窯跡があるが、鉄店窯跡のみが鈞窯タイプを生産している。龍泉青磁と比べると質が悪い。

## いくつかのコメント

龍泉窯跡は龍窯と言われる。登窯跡は同じ場所に数基が重なって築かれることが多い。長さ30mから80mほどあり、幅は2m前後で、片側に十を超える窯門が並び、最上部に煙突があり、傾斜した床が丘斜面を登るのが典型的なものである。しかし源口窯跡群では焚口（投柴孔、火堂）と焼成室、煙道の3つで構成され、全長4mから8m、窯門が焼成室に1つある単室窯跡がいくつかある。『龍泉東区窯跡発掘報告』では素焼窯と紹介し、窯跡外周辺に素焼坯があるとのみ記述する。製品は14世紀前半と推定できる青磁であり、

素焼窯跡でなく本焼窯跡ではないかと思われる。朱伯謙は良質青磁は長い龍窯ではなく短い龍窯で焼いたというが、単室窯跡は素焼きではなく良質品を焼く窯跡であったかもしれない。安仁の船乗り場に近いダム斜面にも単室窯跡が見えた。

龍窯の窯体はいくつかの仕切り壁で平面形が長方形の部屋に分けられ、床に匣鉢が整然と並び、仕切り壁の下部に長方形の通焰孔が7つほど並ぶ。日本では16世紀末頃から同型式の連房状登窯が登場するが、以前はその起源が不明瞭であった。中国南部に連房状階段式登窯の起源があると推定していたが、最近中国及び朝鮮で連房状（階段式）登窯跡が発見され、中国がより古いことが明らかとなり、東北アジア地域の窯体技術の系譜が辿れるようになった。

峰脚窯跡には高台内が二重に窪む碗盤が落ちていた。龍泉窯跡の発掘報告書に紹介されておらず、日本の遺跡出土品にもそうした高台はないと思われる。

龍泉窯が出土し始める年代が11世紀後半という日本の大宰府編年、中国の寧波東門外碼頭遺跡第4層出土の越窯、龍泉窯、婺窯製品との比較から、龍泉窯の開始年代を北宋11世紀後半と推定している。中国と日本の編年が比較され共通認識が生まれつつある。11～12世紀の地元紀年墓から出土した龍泉青磁、13世紀前半の白胎厚釉蓮弁文碗、13世紀末の八思巴文字蓮弁文碗、14世紀前半の新安沈船（1323年）出土品にある使司師府公用が文献に現れる時期は1302年以後であること、15世紀初～16世紀初の墓から出土する歴史人物故事碗（人形手）、等を利用して、龍泉窯8期編年は北宋晩期から明代中期の年代が当てられている。

窯跡出土の青磁と、輸出されて使用された後に廃棄された青磁が出土する遺跡の年代は、30年ほどずれる場合があると感じた。

朱伯謙は明代にも龍泉青磁が宮廷用に焼かれたことが、割れた破片が詰まった穴の発見で推定できるといふ。清代にも龍泉青磁は焼かれていた。